

毛利邸は、日本が世界の大国としての地位を確立しようとしていた、20 世紀の始めに建造された家です。その結果この邸宅には、当時非常に珍しかった近代的機能が各所に取り入れられています。

様々な「新技術の採用」

革新的な部分は、文字通り邸宅に着くなりすぐに始まります。たとえば、路をたどった先にある大きな表門は、セメントの土台の上に建てられています。当時、セメントは日本ではまだ珍しい材料でした。毛利邸はまた、電話のついた家としてもこの地方では初めてでした。そんなわけで、今日でも毛利邸の電話番号の最後の 4 桁は 0001 です。電気はアメリカの自家発電機によって供給され、お湯供給用のボイラーもありました。

珍しい輸入品

幕府時代の鎖国方針とは対照的に、1868 年以降の日本は世界の貿易ネットワークと密接に繋がっていました。これが毛利邸の家具・調度品にも反映されています。たとえば、照明器具（家紋である花紋が組み込まれている）はすべて、ドイツでカスタムメイドされていました。

豪華さと実験

大正時代（1912～26 年）の日本では、板ガラスはまだ珍しいものでした。ですから家にガラス窓をたくさん付けることは、富と地位を示す一つの手段でもありました。毛利邸の客間棟の 2 階には、各 15 枚という数の窓が付いています。そして非常に珍しい、どちらかというと非実用的ともいえるタッチで、風雨から家を守るはずの雨戸は、窓の外ではなく内側に取り付けられているのです！窓ガラスをよく見ると、隆起した部分や気泡、その他の不規則な部分が見られます。これはおそらく、ガラスが機械ではなく、まず吹き、次に延ばし、と手作業で作られたものだからだと考えられます。

巨大な岩と古代の木々

客間棟の中庭にあるソテツのそばには、巨大な岩があります。現実的な理由から、この岩の方がまず据え置かれ、家はその後で、岩を囲むようにして建てられることになったのです！客間棟の紙なし引き戸には、1000 年以上の樹齢を誇る日本杉、屋久杉が使われています。